

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	ほわわ台東		
○保護者評価実施期間	2026年1月7日		～ 2026年 1月 24日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	20	(回答者数) 19
○従業者評価実施期間	2026年 2月 2日		～ 2026年 2月 13日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	15	(回答者数) 11
○事業者向け自己評価作成日	2026年3月4日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	一人ひとりの利用者さんに合わせた支援をしている。	<ul style="list-style-type: none"> ・コンサルテーションを受けながら、一人ひとりの発達段階や発達特性をアセスメントし、それに基づいて支援内容を検討している。 ・リハビリ職等と連携し、姿勢調整や身体の使い方を工夫しながら、その子に合った活動や遊びの経験を積めるよう支援している。 ・口腔機能や発達段階に合わせて食事形態を調整し、食べる楽しさや生活の豊かさを感じられるよう関わっている。 ・視線入力や絵カードなどのコミュニケーションツールを取り入れ、子どもに合った意思表示の方法を検討している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発達特性のアセスメント力や支援の構造化について職員が学び、子どもが見通しを持って過ごしやすい環境づくりを進める。 ・個別支援計画と日々の活動のつながりを意識し、一人ひとりの発達課題に応じた支援の質の向上を図る。 ・コミュニケーション支援や食事支援について、家庭や保育園等と連携しながら生活全体での支援につなげていく。
2	医療依存度が高い、発達障害、知的障害など多様な状態の子どもが安心して通所できる環境と子どもの気持ちに寄り添った支援を実施している	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども一人ひとりの発達状況や体調、気持ちを丁寧に観察し、その日の状態に合わせて支援内容や関わり方を調整している。 ・看護職員、保育士、児童指導員など多職種で情報共有を行い、子どもの安心感を大切に支援をチームで行っている。 ・リハビリ職等と連携し、姿勢調整や身体へのアプローチを行いながら、一人ひとりに合った活動を行っている。 ・絵カードや視線入力などのコミュニケーションツールを活用し、子どもに合った意思表示の方法を検討している。 ・発達段階や口腔機能に合わせた食事形態の調整などを行い、食べることの楽しさや生活経験の広がりにつながる支援を行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者担当制や職員間のケース共有を強化し、子どもの成長や課題をより深く理解した支援につなげていく。 ・研修や事例検討を通して、発達特性の理解や子どもの気持ちに寄り添った関わりについて学び、支援の質の向上を図る。 ・個別支援計画と日々の活動のつながりを意識し、目的のある支援実践を行う。 ・コミュニケーションツールや食事支援などについて、家庭や保育園等と連携しながら支援の広がりを図る。

	事業所の弱み(※) だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	保護者同士の交流機会や情報共有の場が十分とはいえないこと。	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の送迎や個別対応が中心となっており、保護者同士が交流する機会を十分に設けられていない。 ・利用児の居住地域が広範囲にわたることや、医療的ケアなど個別性の高い支援が必要な児童も多いことから、交流の場を設ける際の方法や内容に工夫が必要である 	<ul style="list-style-type: none"> ・防災訓練や安全対策の取組について、通信や掲示等を通して保護者へ周知する。 ・保護者が事業所の安全管理体制を理解し安心できるよう、情報提供の方法を工夫する。
2	事業所の取組について、保護者への周知が十分ではない場合があること	<ul style="list-style-type: none"> ・防災訓練や安全対策などの取組は実施しているものの、その内容や意図について保護者へ十分に伝わっていない可能性がある。 ・日々の支援や連絡事項が多く、事業所の取組や活動の工夫を説明する機会が限られている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・防災訓練や安全対策の取組について、通信や掲示などを通して保護者へ周知する。 ・保護者が事業所の安全管理体制を理解し安心できるよう、情報提供の方法を工夫する。
3	支援計画に基づくチーム支援について、職員間で理解の差が生じる場合があること。	<ul style="list-style-type: none"> ・支援内容が多岐にわたるため、活動の目的や意図が十分に共有されていない場合がある。 ・職員の経験や専門性の違いにより、支援の理解に差が生じることがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員会議や研修を通して支援の目的やねらいを共有する。 ・ケース検討や振り返りを行い、職員全体で支援の方向性を確認する。